

その手があったのか!

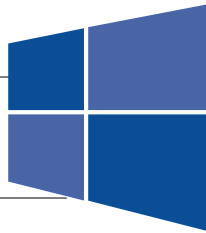
日経PC21

Windows

基本テクから

新機能まで

完全網羅



10

裏ワザ事典

目から
ウロコの
100
連発!

- お節約機能をすべて見直し
日ごろのイライラを解消!
- あっと驚く“隠し機能”を発見!
自分だけの快適環境を構築
- 速く! 楽に! 快適に!
絶対に使うべき新機能&新設定

日経パソコン

第5章

セキュリティ の裏ワザ

パソコンの中は個人情報の固まりなので、データの漏洩に注意したい。OSやアプリのプライバシー設定をよく確認し、パスワード管理を徹底する必要がある。子供や他人に貸し出す際の便利機能も活用したい。

ウィンドウズ10の プライバシー設定をまるごと見直す

初期設定のままでは情報がダダ漏れの可能性も

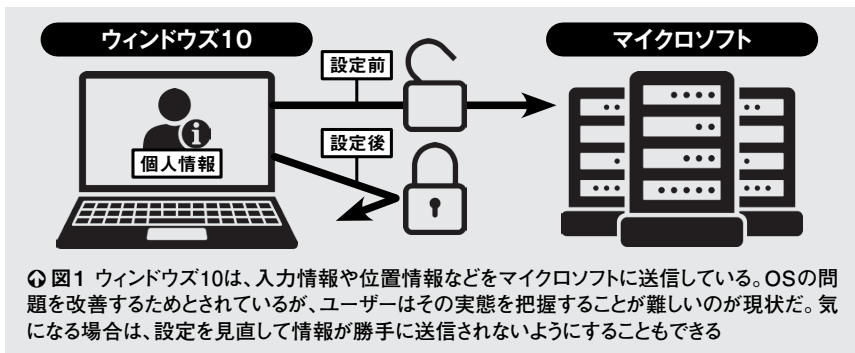


図2 スタートメニューを開き、歯車アイコンをクリックして「設定」画面を表示(1)。「プライバシー」を選択する(2)

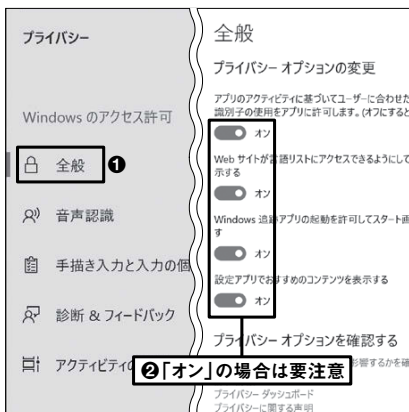


図3 左側で「全般」を選択(1)。「プライバシーオプションの変更」にあるスイッチが「オン」になっている場合、ほかのプライバシー設定も初期のままになっている可能性が高い(2)

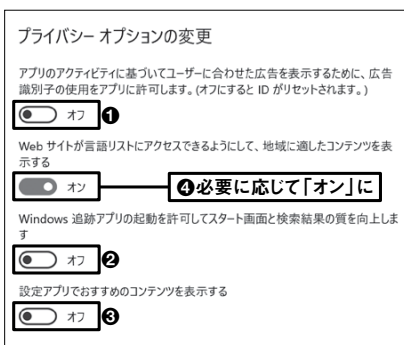


図4 アプリの使用状況(12)や、ウィンドウズの設定状況(3)などの情報を収集していることがわかる。基本的にすべて「オフ」で問題ないが、「Web サイトが言語リストに…」を「オン」にしておくと、ウェブサイトを閲覧する際に日本語のサイトが優先的に表示される(4)。必要に応じて切り替えよう

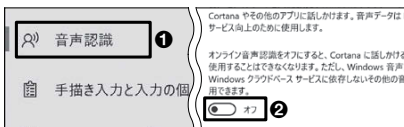


図5 続いて「音声認識」を選択(1)。音声アシスタント機能を利用したときの音声情報を収集している。コルタナの音声認識機能を使わないなら「オフ」にして問題ない(2)

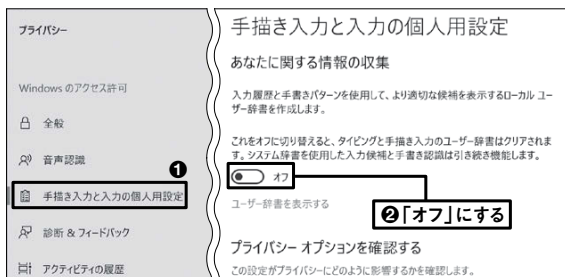


図6「手描き入力と入力の個人用設定」を選択(①)。ここが「オン」になっていると、キーボードやマウスで入力した文字情報が収集されている可能性がある。「オフ」にするとユーザー辞書がリセットされるが、入力候補機能は引き続き使用できるので、特に不便を感じることはないだろう(②)

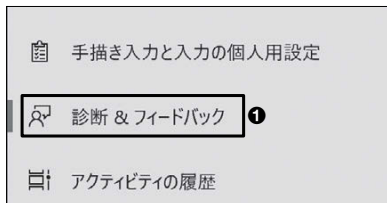
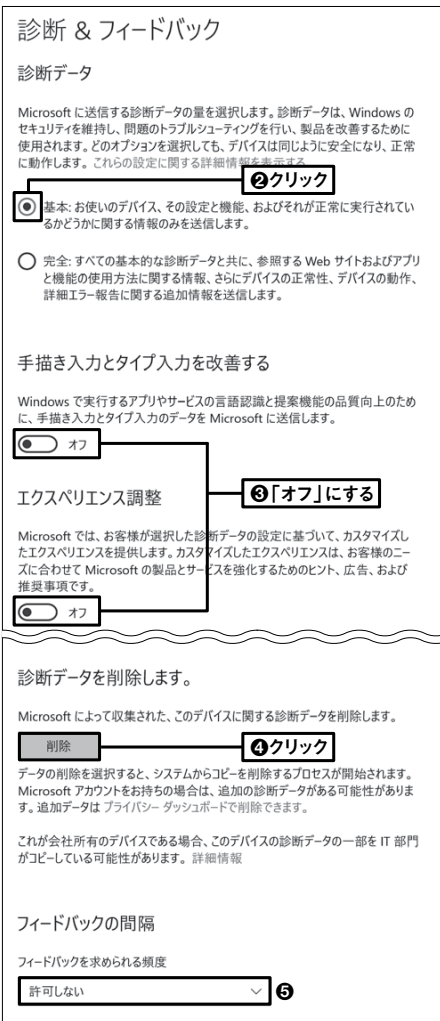


図7「診断 & フィードバック」を開く(①)。一番上の「診断データ」は「基本」を選択する(②)。ウィンドウズ10の新しいバージョンをリリース前に体験できる「Windows Insider Program」に参加している場合などの特殊なケースを除き、スイッチはすべて「オフ」にして問題ない(③)。その後、「診断データを削除します」項目の「削除」ボタンをクリックし、これまで収集されたデータを一度リセットしよう(④)。「フィードバックの間隔」項目の「フィードバックを求められる頻度」は「許可しない」に切り替える(⑤)

パソコンがインターネットに接続している限り、実は、さまざまな情報が知らない間に送信されている。各種アプリをインストールする際に表示される利用許諾に、「ユーザービリティの向上のために情報の収集を行う」などと書かれていることも多い。一般的なアプリは、怪しいと思ったらアンインストールすればいいが、問題はOSだ。ウィンドウズ10も、多くの情報をマイクロソフトに送信している(図1)。これ



をトラッキングというが、これはウィンドウズをセットアップしたときから行われるもので、ほとんどのユーザーが後から変更することなく初期設定のままウィンドウズ10を使っている。悪意のあるトラッキングをマイクロソフトが行うとは思えないが、入

力した文字の履歴やウェブサイトのアクセス記録など、プライバシー性の高い情報が流されている可能性もある。バックグラウンドで勝手にインターネットを利用しているわけでもないので、気になるなら見直して、不要なものを解除しよう(図1～図14)。

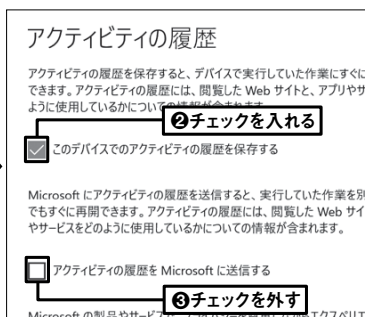
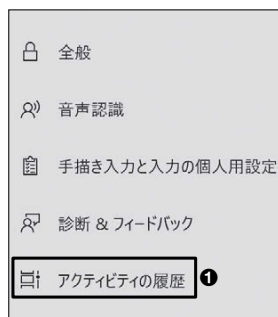


図8「アクティビティの履歴」を選択(1)。「このデバイスでのアクティビティ履歴を保存する」にはチェックが入っている問題ないが(2)、アクティビティの履歴をMicrosoftに送信する(3)は外したほうがよい(4)。

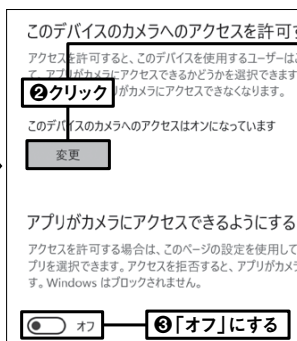
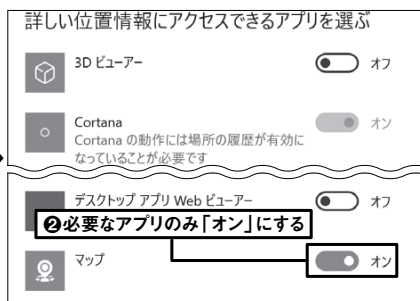
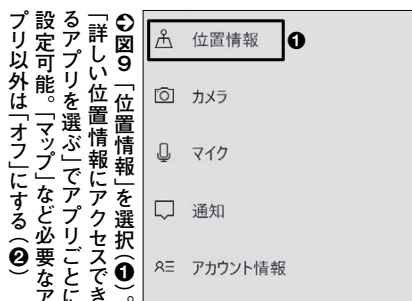
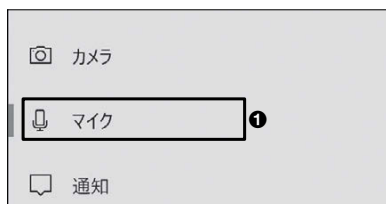


図10「カメラ」を選択(1)。「Windows Hello」で顔認証によるサインインを行う場合はデバイスからのアクセスを有効にする必要がある(2)。ビデオチャットなど、カメラと連動するアプリを使用しない場合は「アプリがカメラにアクセスできるようにする」を「オフ」にする(3)。



④➡図11「マイク」を開く(①)。コルタナの音声認識機能を利用する場合は「オン」にする必要がある(②)、そうでなければ「オフ」にして問題ない

マイク

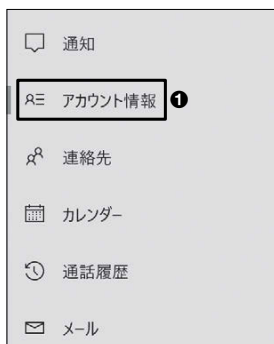
アプリがマイクにアクセスできるようにする

アクセスを許可する場合は、このページの設定を使用して、マイクにアクセスできるアプリを選択できます。アクセスを拒否すると、アプリがマイクにアクセスできなくなります。Windows はブロックされません。

②必要に応じて「オン」にする

マイクにアクセスできるアプリを選ぶ

意図した機能を果たすためにマイクにアクセスすることが必要なアプリもあります。ここでアプリをオフにすると、アプリの動作が制限される可能性があります。



このデバイスのアカウント情報へのアクセスを許可する

アクセスを許可すると、このデバイスを使用するユーザーはこのページの設定を使用して、アプリがアカウント情報にアクセスできるかどうかを選択できます。アクセスを拒否すると、どのユーザーについても、アプリがアカウント情報にアクセスできなくなります。

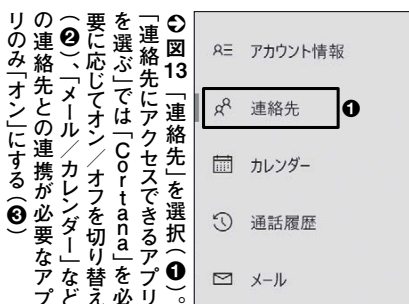
このデバイスのアカウント情報へのアクセスはオフになっています

変更 ② このデバイスのアカウント情報のアクセス オフ

アプリがアカウント情報にアクセスできる場合は、このページの設定を使用して、名前や画像などのアカウント情報にアクセスできるアプリを選択できます。アクセスを拒否すると、アプリがアカウント情報にアクセスできなくなります。

オフ

④➡図12「アカウント情報」では(①)、エッジなどのアプリにマイクロソフトアカウント情報へのアクセスを許可できるが、基本的には「オフ」にして問題ない(②)。エッジでエラーメッセージが表示された場合に再設定すればよい



④➡図13「連絡先」を選択(①)。「連絡先」にアクセスできるアプリを選ぶ(②)。「Cortana」を必要に応じてオン/オフを切り替え(③)。「メール/カレンダー」などの連絡先との連携に必要なアプリのみ「オン」にする(④)

連絡先にアクセスできるアプリを選ぶ

一部のアプリは、意図した機能を果たすために連絡先にアクセスする必要があります。ここでアプリをオフにすると、アプリでできることが制限される可能性があります。次のように「必要に応じて「オン」にする」：People。

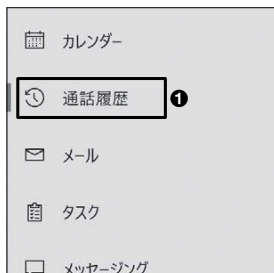
②必要に応じて「オン」にする

Cortana オフ

マップ オフ

③必要なアプリのみ「オン」にする

メール/カレンダー オン



このデバイスでの通話履歴へのアクセスを許可する

アクセスを許可すると、このデバイスを使用するユーザーはこのページの設定を使用して、アプリが通話履歴にアクセスできるかどうかを選択できます。アクセスを拒否すると、どのユーザーについても、アプリが通話履歴にアクセスできなくなります。

このデバイスの通話履歴へのアクセスはオフになっています

変更 ② このデバイスの通話履歴へのアクセス オフ

アプリが通話履歴にアクセスできる場合は、このページの設定を使用して、通話履歴にアクセスできるアプリを選択できます。アクセスを拒否すると、アプリが通話履歴にアクセスできなくなります。

④➡図14「通話履歴」は(①)、「メッセージング」や「スカイプ」などのアプリで通話した記録を管理する。これらを使うことがなければ「オフ」にしておく(②)

ローカルアカウントのパスワードはUSBメモリーでリセットできる

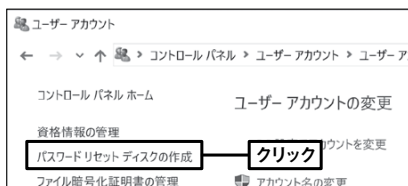
万が一に備えて「リセットディスク」を作成する



① 図1 デスクトップの検索欄に「コントロールパネル」と入力(①)。検索結果に「コントロールパネル」アプリが表示されたら選択する(②)



① 図2 コントロールパネルが開いたら「ユーザーアカウント」をクリックし(①)、次の画面で再び「ユーザーアカウント」をクリックする(②)



① 図3 ウィンドウ左側にある「パスワードリセットディスクの作成」をクリックする

パスワード ディスクの作成ウィザードの開始

このウィザードを使って「パスワードリセット ディスク」を作成します。このユーザー アカウント用のパスワードを忘れてログオンできなくなった場合、このディスクを使って新しいパスワードを作成することができます。

注意: ディスクの作成は 1 回だけが必要です。パスワード変更のために作成し直す必要はありません。

警告: 誰でもこのディスクを使ってパスワードをリセットし、このアカウントへアクセスすることができます。

USB フラッシュドライブにパスワード回復情報を保存するには、USB フラッシュドライブを挿入してから [次へ] をクリックします。

続行するには、[次へ] をクリックしてください。



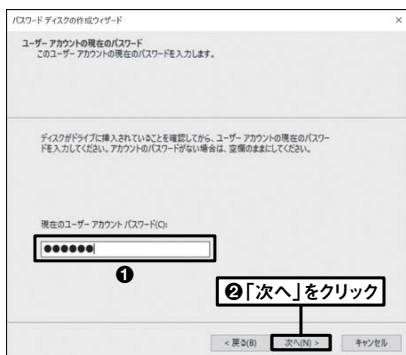
① 図4 「パスワードディスクの作成ウィザード」が始まる。「次へ」をクリックする



① 図5 USBメモリーをパソコンに接続しておく。必ずしも空である必要はなく、普段から使用しているもので問題ない



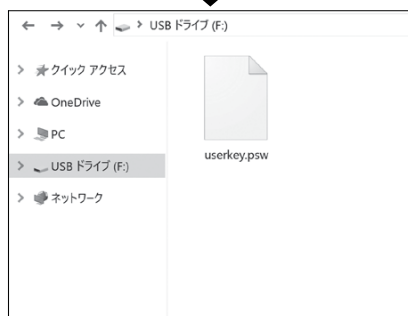
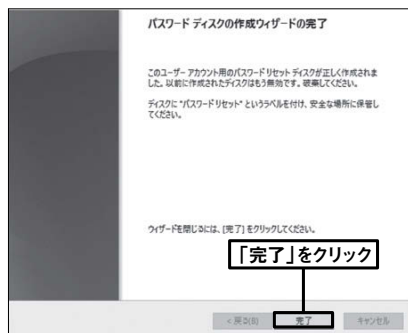
④ 図6 パソコンに接続したUSBメモリーが表示されていることを確認し(①)、「次へ」をクリックする(②)



④ 図7 ウィンドウズにサインインする際に入力するローカルアカウントのパスワードを入力し(①)、「次へ」をクリックする(②)



④ 図8 USBメモリーへの書き込みが実行される。ゲージが100%になったら「次へ」をクリック



④ 図9 リセットディスクが作成された。「完了」をクリックしてウィザードを閉じる。なお、USBメモリーにはこのようなファイルが出来上がる

ウィンドウズにローカルアカウント(パソコン内に保存されるアカウント)でウィンドウズにサインインしている場合、パスワードを忘れてしまったときに大変だ。マイクロソフトアカウントとは異なり、クラウドとひも付いていないため、パソコン本体で解決するしかない。

忘れてしまったローカルアカウントのパスワードはリセットして再設定するしかないが、そのためには、あらかじめ「リセットディスク」を作っておく必要がある(図1～図9)。リセットディスクの作成は専用のウィ

リセットディスクでパスワードをリセットする



⑩ 図10 前ページ図1～図9で作成したリセットディスク（USBメモリー）をローカルアカウントのパスワードがわからなくなったパソコンにセットする。リセットできるのはリセットディスクを作成したパソコンのみとなる



⑪ 図11 パソコンを起動し、サインイン画面で「サインインオプション」をクリック(①)。鍵アイコン（ローカルパスワード）を選択後、パスワード欄の右にある「→」をクリックする(②③)

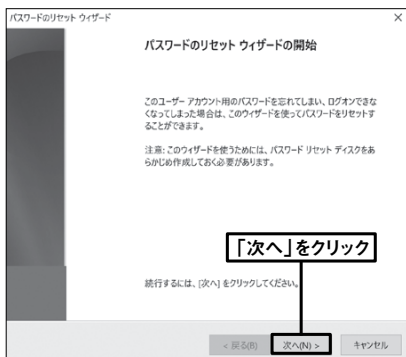
ザードで行う。「コントロールパネル」を開き、「ユーザーアカウント」を2度クリックする。「パスワードリセットディスクの作成」でウィザードを起動したら、USBメモリーをパソコンにセットする。作成したリセットディスクは万が一のときのために大事に



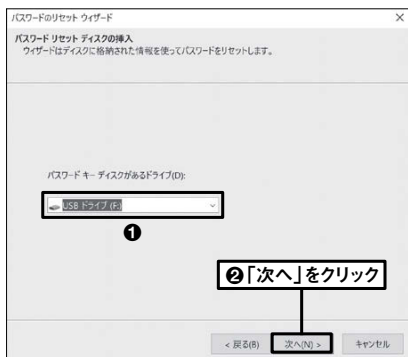
⑫ 図12 「パスワードが正しくありません」と表示されたら「OK」をクリックする



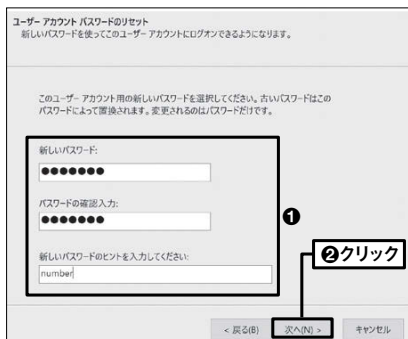
⑬ 図13 「パスワードのリセット」をクリックする



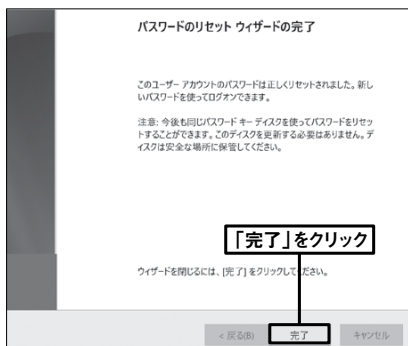
⑭ 図14 「パスワードのリセットウィザード」がスタートする。「次へ」をクリックして続行する



④ 図15 接続したUSBメモリーが読み込まれる。ドライブの名前を確認し(①)、間違いなければ「次へ」をクリックする(②)



④ 図16 パスワードを新たに設定する(①)。以前のパスワードを入力する必要がないので、誰でもリセットできてしまう。「次へ」をクリック(②)

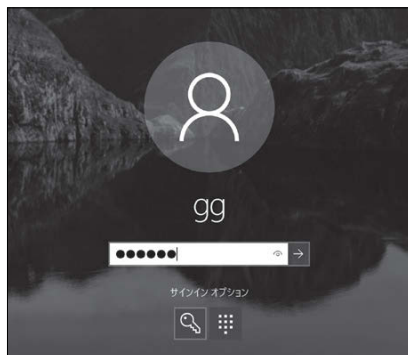


④ 図17 パスワードがリセットされた。「完了」ボタンを押してウィザードを終了しよう

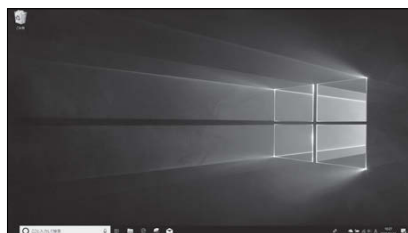
保管しよう。

パスワードのリセット方法は、作成したリセットディスクを挿入し、サインイン画面から「パスワードのリセット」をクリックする(図10～図13)。後はウィザードに従って新しいパスワードを設定すればサインインができるようになる(図14～図19)。

ローカルアカウントのパスワードのリセットは、このUSBメモリーさえあれば誰でも実行できる。裏を返せば、他人のパソコンにサインインできてしまうということなので、USBメモリーの保管には特に気をつけよう。



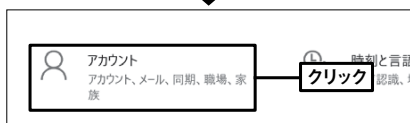
④ 図18 再びサインイン画面が表示される。新しいパスワードを入力して「Enter」キーを押す



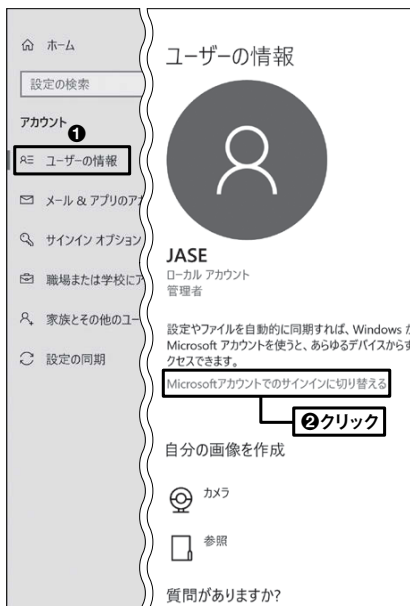
④ 図19 無事サインインできた。同じパソコンなら、後もこのリセットディスクを使って何度でもパスワードをリセットすることができる

サインインパスワードのリセットは マイクロソフトアカウントが最も安全

マイクロソフトアカウントを取得してサインイン



① 図1 スタートメニューを開き、歯車アイコンをクリックして「設定」画面を表示(①)。「アカウント」を選択する(②)

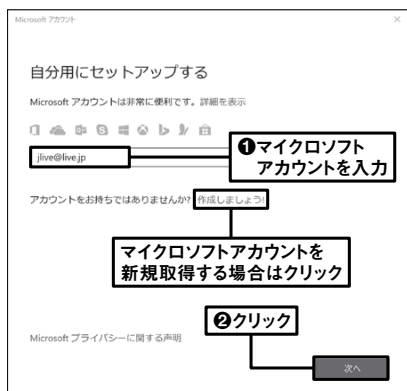


② 図2 左側で「ユーザーの情報」を選択(①)。「Microsoft アカウントでのサインインに切り替える」をクリックする(②)

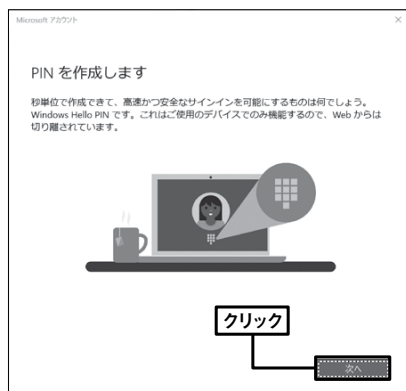
120～123ページで、ローカルアカウントのリセット方法を解説したが、パスワード情報がパソコン内にしか保存されないという理由から、専用のリセットディスクがないと、パスワードを忘れてしまったときにサインインする方法はなくなってしまふ。

ウィンドウズのサインインは、ローカルアカウント以外にもマイクロソフトアカウントを利用する方法がある。クラウドとひも付いているので、パスワードを忘れてしまっても、リセットディスク不要でパスワードをリセットできるのがメリットだ。リセット時は、電話認証やメール認証で本人確認を行うので、リセットディスクのように誰でもパスワードを再設定できる危険性がない。マイクロソフトアカウントを使ったサインインは、セキュリティが強化され、万が一パスワードを忘れてしまっても安全にリセットできる。もし現在のサインインをローカルアカウントで行っているなら、マイクロソフトアカウントに切り替えてみよう。

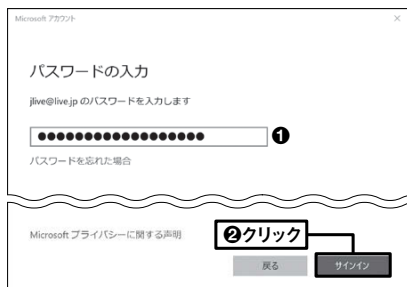
マイクロソフトアカウントは、Gメールやヤフーメールなど、マイクロソフトと無関係のメールアドレスからでも無料で取得できるので、気軽に登録してみよう(図1～図13)。



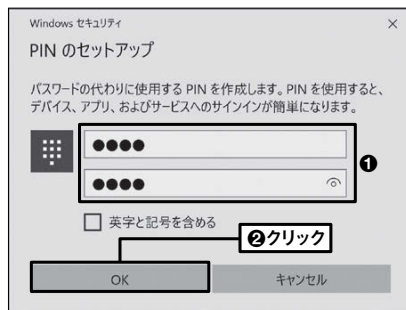
④ 図3 マイクロソフトアカウントを入力して「次へ」をクリック(①②)。まだ取得していない場合は、「作成しましょう!」から新規取得できる



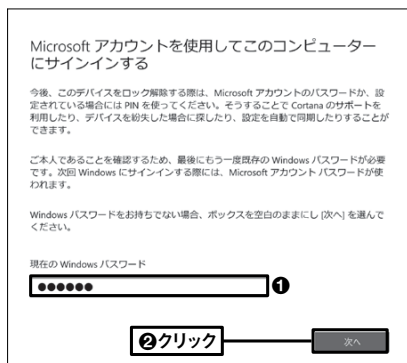
④ 図6 PIN (暗証番号) によるサインインも併せて設定できる。「次へ」をクリックする



④ 図4 マイクロソフトアカウントのパスワードを入力し(①)、「サインイン」をクリック(②)



④ 図7 PIN として使用したい4桁の数字を入力し(①)、「OK」をクリックする(②)。PINは4桁以上にすることも可能だが「12345」といった単純なパターンには設定できない



④ 図5 ローカルアカウントのパスワード (現在のサインインパスワード) を入力し(①)、「次へ」をクリックする(②)



④ 図8 設定が完了すると、図2の画面がこの図のように切り替わる。「ローカルアカウントでのサインインに…」で元に戻すことも可能だ

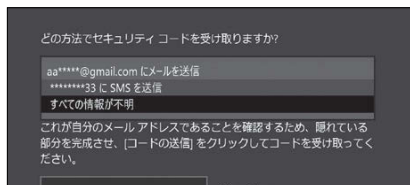
マイクロソフトアカウントでパスワードをリセット



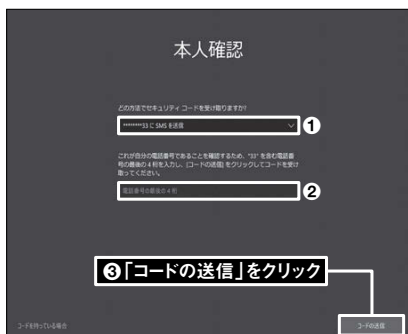
④ 図9 サインイン画面で「サインインオプション」をクリック(①)。カーソルアイコン(マイクロソフトアカウント)を選択後(②)、「パスワードを忘れた場合」をクリックする(③)



④ 図10 「アカウントの回復」画面が表示される。マイクロソフトアカウントとを入力したら(①)、「次へ」をクリックする(②)



④ 図11 本人確認のためにセキュリティコードの受け取り方を選択する。パソコンを使わずに確認可能なSMSがお薦めだ



④ 図12 ここでは例として、コードの受け取り方法を「…にSMSを送信」に設定した(①)。自分の電話番号の下4桁を入力し(②)、「コードの送信」をクリックする(③)



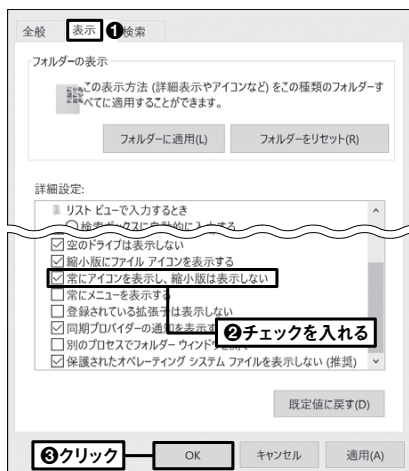
④ 図13 携帯電話に届いたセキュリティコードを入力(①)。「次へ」をクリックする(②)。次の画面で新しいパスワードを入力し(③)、最後に「次へ」をクリックすればパスワードがリセットされる(④)

画像ファイルや動画ファイルのサムネイル表示をオフにする

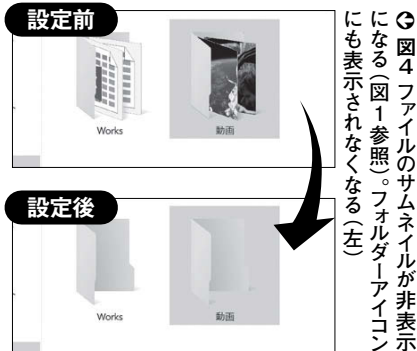
ファイルの中身が他人に知られるのを防ぐ



④ 図2 エクスプローラーの「表示」を選択(①)。「オプション」アイコンをクリックする(②)



④ 図3 「表示」タブを開く(①)。「詳細設定」で、「常に表示し、縮小版は表示しない」にチェックを入れ(②)、「OK」をクリック(③)

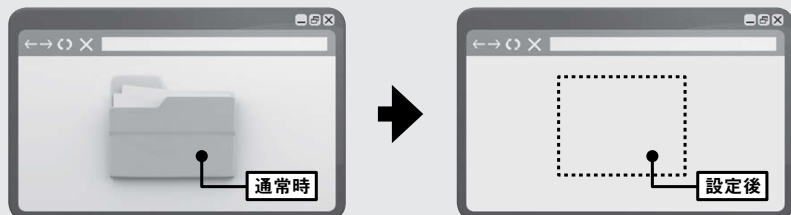


サムネイル表示は画像や動画を開かなくても内容が判別できて便利だ。しかし、パソコンの画面を見られただけで、内容を他人に知られてしまうリスクもある(図1)。

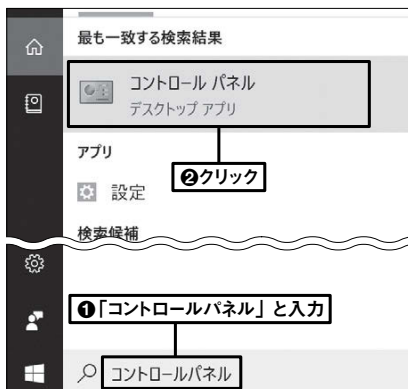
サムネイル表示は、エクスプローラーの表示設定で、「常に表示し、縮小版は表示しない」にチェックを入れることでオフにできる(図2～図4)。サムネイルを再び表示したい場合は、同じ手順でチェックを外せばよい。

ほかの人に見られたくない ファイルやフォルダーを隠す

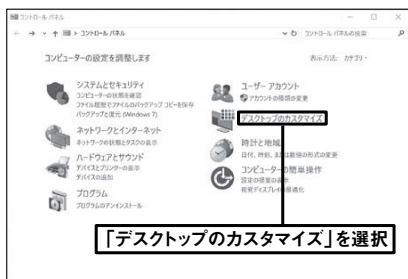
エクスプローラーの表示設定を変更する



④ 図1 ウィンドウズの「隠しファイル」機能を使えば、他人に見られたくないファイルやフォルダーをパソコンから削除することなく隠すことができる



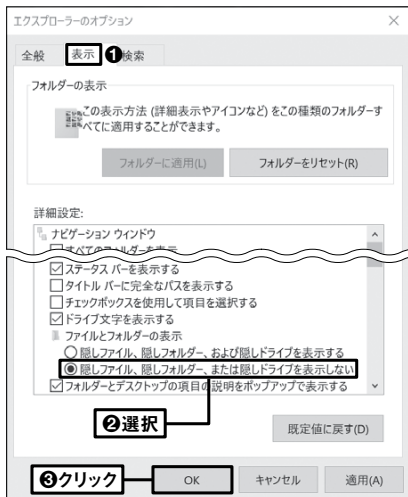
④ 図2 デスクトップの検索欄に「コントロールパネル」と入力(①)。検索結果に「コントロールパネル」が表示されたら選択する(②)



④ 図3 コントロールパネルが開いたら、「デスクトップのカスタマイズ」をクリックする

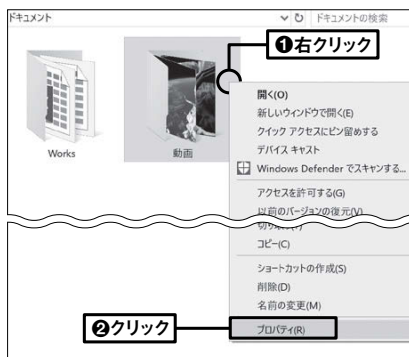


④ 図4 「エクスプローラーのオプション」の「すべてのファイルとフォルダーを表示」をクリック



④ 図5 「表示」タブを開き(①)、「詳細設定」で、「隠しファイル、フォルダー、または隠しドライブを表示しない」を選択して印を付ける(②)。「OK」をクリックして設定を保存する(③)

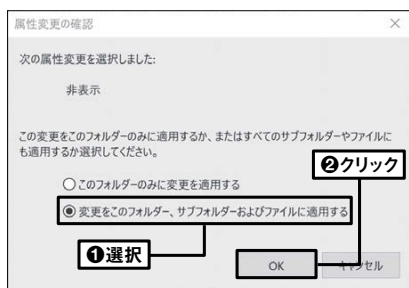
「隠しファイル」属性を適用して非表示する



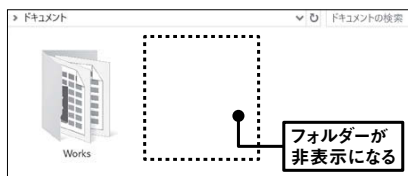
④ 図6 隠したいフォルダーを右クリックして「プロパティ」を選択する(①②)



④ 図7 「全般」タブの「隠しファイル」にチェックを入れ(①②)、「OK」をクリックする(③)



④ 図8 隠しファイル属性をフォルダー内のすべてのファイルやフォルダーに適用する場合は「変更をこのフォルダー、サブフォルダーおよび…」を選択(①)。「OK」をクリックする(②)



④ 図9 フォルダーが非表示なる。削除されたわけではないが、選択や検索ができなくなる



④ 図10 エクスプローラーの「表示」タブをクリックして「隠しファイル」にチェックを入れると(①②)、属性を保ったまま、隠しフォルダーを表示することができる(③)

ファイルやフォルダーの属性を変更すれば、削除することなくパソコンから隠蔽できる(図1)。

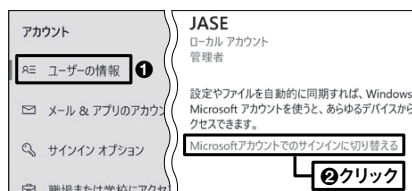
まず、隠しファイルを「表示しない」に設定する必要がある(図1～図5)。フォルダーごとにばらつきが発生しないよう、コントロールパネルで設定をするとよい。属性の変更は個別に設定して構わない。対象ファイルのプロパティを開き、「隠しファイル」にチェックを入れ、適用範囲を指定する(図6～図8)。非表示にしたファイルやフォルダーは、エクスプローラー上で表示を切り替える(図10)。

パソコンの位置を追跡して 遠隔操作でロックをかける

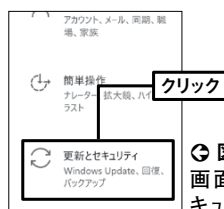
パソコンの居場所をマップに表示して遠隔操作



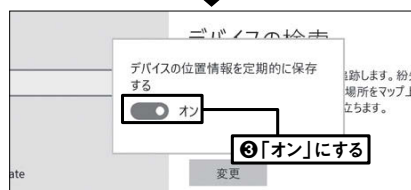
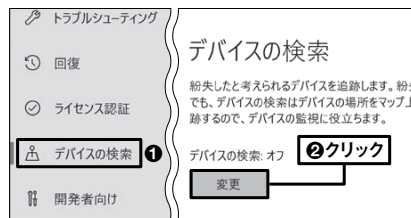
① 図1 パソコンの位置を追跡するには、当該パソコンがマイクロソフトアカウントとひも付いている必要がある。確認のため、スタートメニューから「設定」画面を表示し(①)、「アカウント」をクリックする(②)



② 図2 「ユーザーの情報」を開く(①)。マイクロソフトアカウントとのひも付けがまだの場合、「Microsoft アカウントでのサインインに切り替える」と表示される(②)。クリックしてマイクロソフトアカウントを有効化しよう(124ページ参照)。ひも付けが完了すると、「Microsoft アカウントの管理」と表示される(③)



③ 図3 図1右の「設定」画面に戻り、「更新とセキュリティ」をクリックする



④ 図4 「デバイスの検索」を選択する(①)。「変更」ボタンを押し(②)、「デバイスの位置情報を定期的に保存する」を「オン」にする(③)

ノートパソコンやタブレットなどの紛失時に役立つのが「デバイスの検索」だ。マイクロソフトアカウントを利用したサービスなので、マイクロソフトアカウントの取得とサインインが必須となる(124ページ参照)。

アカウントのユーザー情報を確認し、マイクロソフトアカウントとのひも付けと、パソコンの追跡機能を有効にすれば準備は完了だ(図1～図4)。これにより、万が一パソコンを紛失した場合でも、別のパソコンから紛失したパソコンの現在地を調べることができる。パソコンにGPS機能が付いていない場合は、パソコンに残されたWi-Fiの接続履歴から位置を推測して



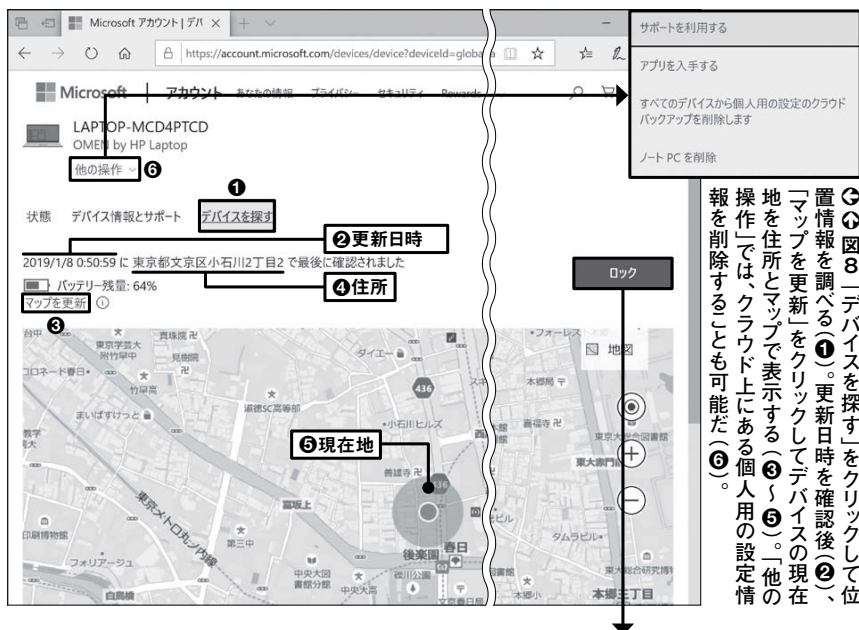
④ 図5 マイクロソフトの公式サイト (https://www.microsoft.com/ja-jp/) にアクセス (①)。マイクロソフトアカウントでサインインし (②)、「My Microsoft account」をクリック選択する (③④)



④ 図6 アカウントの管理ページが表示される。「デバイス数...3 管理」をクリックする。「デバイス数」とは、マイクロソフトアカウントとひも付けしているパソコンやタブレットの数を意味し、ユーザーによって異なる



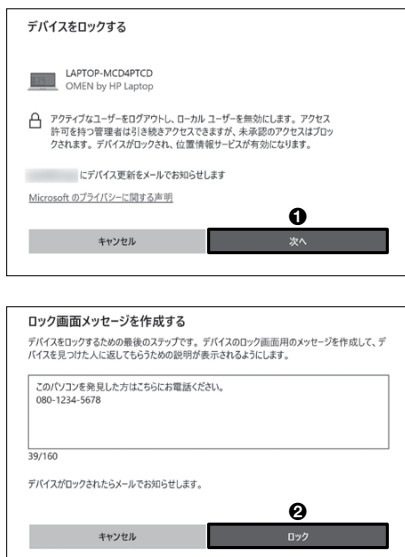
④ 図7 デバイス情報が表示される。「何も問題がない」の表示は、マイクロソフトアカウントと連携が取れていることを意味する (①)。一方、「!」マークの表示は、マイクロソフトアカウントとのひも付けに何らかの問題が生じていることを意味し、デバイスを遠隔操作することはできない (②)。デバイスの位置情報を表示するには「詳細を表示する」をクリックする (③)



①図8「デバイスを探す」をクリックして、位置情報を調べる(①)。更新日時を確認後(②)、マップを更新をクリックしてデバイスの現在地を住所とマップで表示する(③④⑤)。「他の操作」では、クラウド上にある個人用の設定情報を削除することも可能だ(⑥)。

くれる。

ひも付けたパソコンは、ウェブブラウザで管理する。マイクロソフトの公式サイトからサインインし、管理画面にアクセスしよう(前ページ図5～図7)。パソコンの現在地は「デバイスを探す」ページで調べることができる。大体の住所とマップを確認したり、個人用設定に関するデータをクラウド上から削除したりできる(図8)。また、遠隔操作でパソコンにロックをかけることもできる。他人がパソコンのデータにアクセスできないように強制的にログアウトさせたり、ロック画面に連絡先を記したメッセージを表示してパソコンを見つけた人とコンタクトを取ったりすることができる(図9)。



①図8で「ロック」をクリックし、「次へ」→「ロック」の順に押すと、当該デバイスを強制的にログアウトして未承認のアクセスをブロックできる(①②)。その際、メッセージを送信してロック画面に表示させることもできる

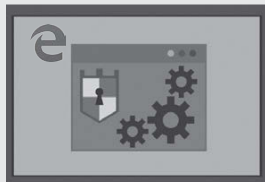
ウェブブラウザ「エッジ」で必ずチェックすべきセキュリティ機能

エッジの「プライバシーとセキュリティ」を見直す

ブロック機能のないウェブブラウザ



エッジで不要なサイトや広告を遮断

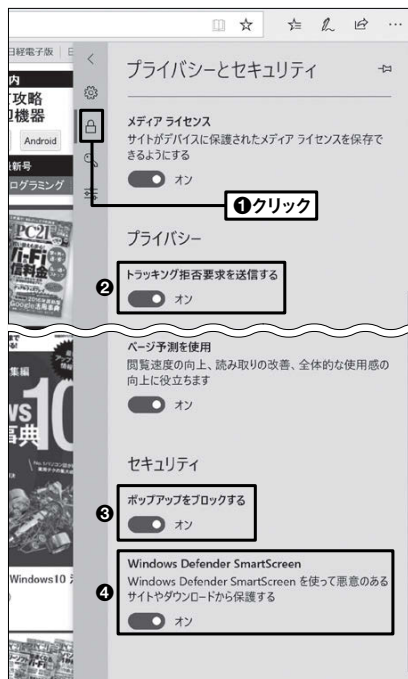


① 図1 ウェブブラウザ「エッジ」には、悪意のあるウェブサイトやポップアップ広告を自動で遮断する機能が搭載されている。設定を有効化して快適なウェブブラウジングを実現しよう



① 図2 エッジを起動し、ウィンドウ右上にある「…」ボタンをクリックし(①)、「設定」メニューを選択する(②)

ウェブブラウザ「エッジ」には、さまざまなセキュリティ機能が標準で搭載されている(図1)。エッジの「設定」メニューで「プライバシーとセキュリティ」を開き、3つの機能を「オン」にする(図1、図2)。ウェブサイト側のトラッキングを避け、悪意のあるウェブサイトや無駄なポップアップ広告を自動でブロックしてくれる。

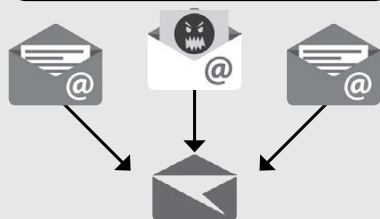


① 図3 左側で「プライバシーとセキュリティ」(南京錠のアイコン)を選択(①)。「プライバシー」欄の「トラッキング拒否要求を送信する」(②)、「セキュリティ」欄の「ポップアップをブロックする」(③)と、「Windows Defender SmartScreen」(④)をすべて「オン」にする

POPメールのセキュリティはGメールで簡単に強化できる

POPメールをGメール経由で受け取る

通常の設定では迷惑メールが届く



Gメール経由で迷惑メールをカット

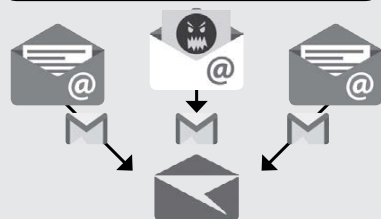


図1 「メール」アプリでPOPメールを使うなら、Gメールを経由させるのがお勧め。優秀なGメールの迷惑メールフィルターの恩恵により、POPメールのセキュリティが実質的に強化される

GメールにPOPメールを追加



図2 Gメールのウェブサイト (<https://www.google.com/intl/ja/gmail/about/#>)を開き、グーグルアカウントでログインする。既存のアカウントを使ってもいいが、アカウントを新規で作成してPOP3メール専用にするのもありだ



図3 受信トレイが表示される。右上の歯車アイコンをクリックして「設定」を選択(12)

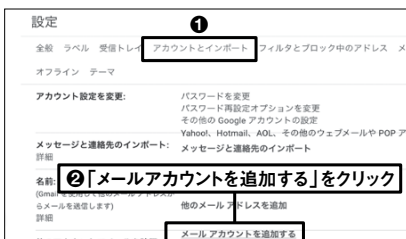


図4 「アカウントとインポート」の「メールアカウントを追加する」をクリック(12)

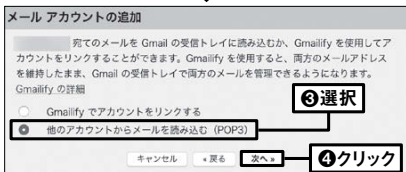


図5 Gメールを経由させるPOP3メールのアドレスを入力して「次へ」をクリック(12)。次の画面で、「他のアカウントからメールを読み込む (POP3)」を選択して「次へ」を押す(34)

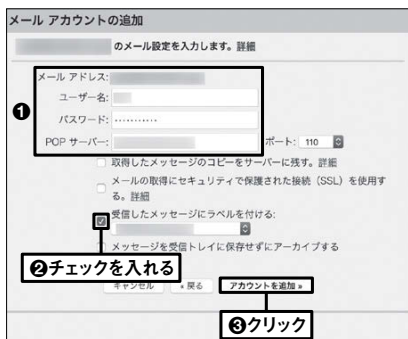


図6 ユーザー名、パスワード、POPサーバーの設定を行う(①)。「受信したメッセージにラベルを付ける」にチェックを入れたら後で管理が楽になる(②)。「アカウントを追加」をクリックすれば設定完了だ(③)

「メール」アプリでGメールを受信



図7 デスクトップの検索欄に「メール」と入力(①)。検索結果にアプリが表示されたらクリックして「メール」アプリを立ち上げよう(②)

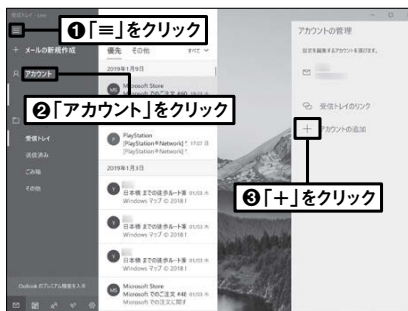


図8 アカウントを追加するには、ウィンドウ左上の「≡」をクリックして「アカウント」を選択する(①②)。右側に表示される「アカウントの管理」で「+」をクリックする(③)



図9 「Google」を選択し、POPメールと関連付けしたGメールを登録する

プロバイダーメールなどのいわゆるPOPメールを利用して、大量に届く迷惑メールにうんざりしていないだろうか。しかしこの問題は、無料のウェブメールサービス「Gメール」を使えば簡単に解決する。POPメールを直に受信するのではなく、一度Gメールを経由させるのだ。具体的には、GメールにPOPメールを登録し、パソコンのメールアプリにはGメールを登録する。ユーザーは、Gメールの強力な迷惑メールフィルターのふるいにかけられたメールだけを受信することになるので、結果的にセキュリティを強化できる(図1)。POPメールは、Gメールの「設定」にある「メールアカウントを追加する」から登録可能(図2～図5)。ウィンドウズ標準の「メール」アプリなら、アカウント登録時にGメールを選べるので設定が簡単だ(図6～図9)。ほかのメールソフトでもGメールに対応していれば同じことができるので、使い慣れたものがあるなら試してみよう。

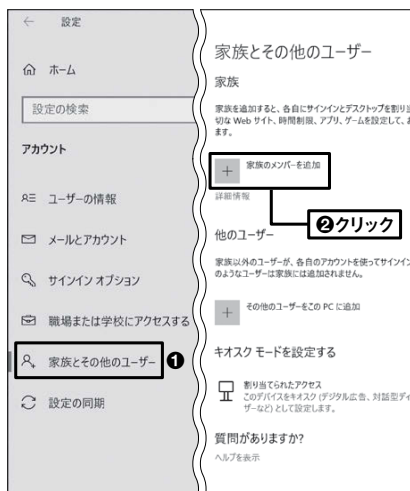
子供用アカウントを作成して 使用時間を制限する

保護者が指定した時間以外は使用不可になる

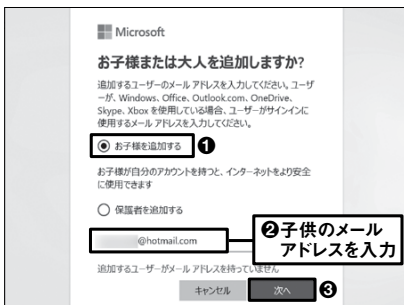
保護者のパソコンで子供を追加



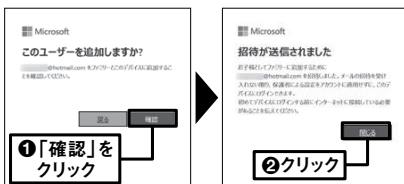
① 図1 スタートメニューを開き、歯車アイコンをクリックして「設定」画面を表示(①)。「アカウント」を選択する(②)



① 図2 左側で「家族その他のユーザー」を選択(①)。「家族」項目の「家族のメンバーを追加」をクリックする(②)



① 図3 「お子様を追加する」を選択し(①)、子供のメールアドレスを入力する(②)。すでに子供に対してマイクロソフトアカウントを付与しているなら問題ないが、まだ取得していない場合はこのメールアドレスでマイクロソフトアカウントを作成しておこう。「次へ」をクリックする(③)

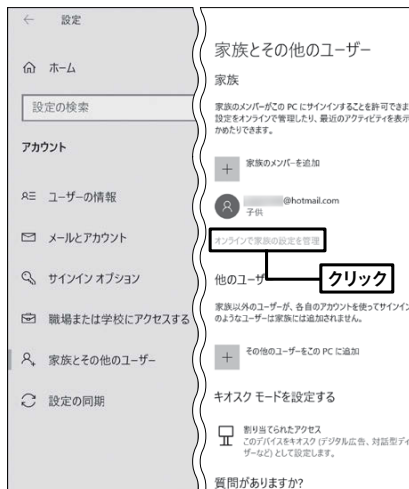


① 図4 「確認」をクリックし、子供のメールアドレスに招待メールを送信する(①)。「閉じる」をクリックして画面を閉じる(②)



① 図5 子供に招待メールが届く。14日以内に、メール上に表示された「参加」をクリックすると、家族メンバーの追加が完了する

保護者のアカウントで管理する



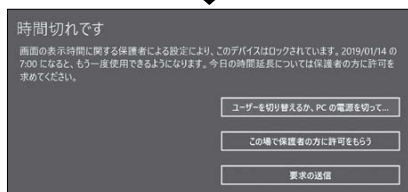
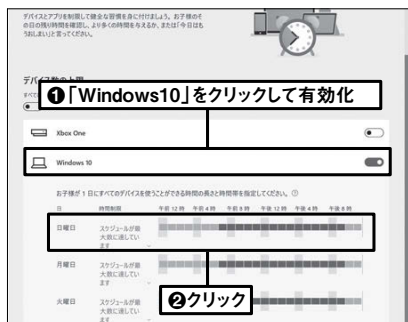
④ 図6 図2の画面に戻ると、子供が家族のメンバーに追加されている。「オンラインで家族の設定を管理」をクリックする



⑤ 図7 ウェブブラウザが立ち上がり、マイクロソフトアカウントのウェブページが表示される。「…今すぐサインインしてください」をクリック



⑥ 図8 ファミリーグループの管理画面に切り替わる。「子供」項目の「使用時間」をクリック



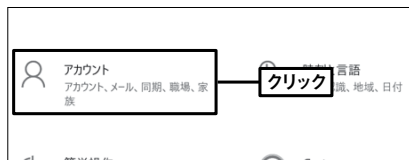
⑦ 図9 「Windows10」を選択してスイッチを「オン」に切り替える(①)。スケジュール表をクリックすると、曜日ごとの使用時間を指定できる(②③)。子供のアカウントでウィンドウズにサインインすると、指定時間外にアラートが表示され、利用できなくなる

保護者が管理できる子供用のアカウントを作成すれば、子供がパソコンでいつ何をしているかを管理できる。

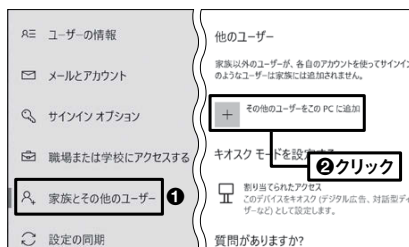
子供用のアカウントは、「設定」画面の「アカウント」にある「家族のメンバーを追加」で作成する(図1、図2)。あらかじめマイクロソフトアカウントとひも付けておこう(図3～図5)。作成したアカウントはウェブサイト上で管理可能だ(図6～図8)。設定した時間以外はパソコンを操作できないなどの制限ができる(図9)。

特定のアプリしか使用できない アカウントを作成する

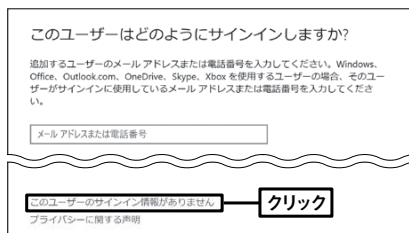
ローカルアカウントを作成してアプリを制限する



④ 図1 スタートメニューの歯車アイコンを押して「設定」画面を開き、「アカウント」を選ぶ



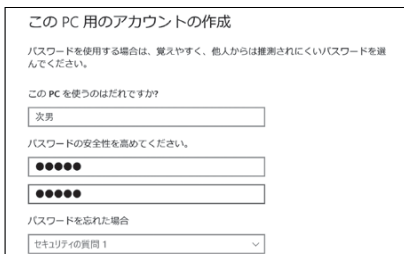
④ 図2 左側で「家族とその他のユーザー」を選択(①)。「他のユーザー」項目の「その他のユーザーをこのPCに追加」をクリックする(②)



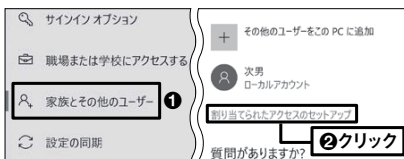
④ 図3 メールアドレスの入力欄は空にしたまま、「このユーザーのサインイン情報がありません」をクリックする



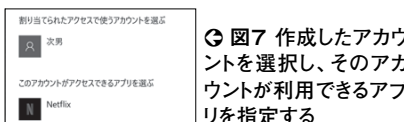
④ 図4 次はアカウントの作成を促される。すべて空欄のまま、「Microsoft アカウントを持たないユーザーを追加する」をクリック



④ 図5 アカウント名、パスワード、セキュリティの質問を入力してアカウントを作成する



④ 図6 図2の画面に戻り、「割り当てられたアクセスのセットアップ」をクリックする(①②)



④ 図7 作成したアカウントを選択し、そのアカウントが利用できるアプリを指定する

パソコン内のアプリを他人が勝手に起動できないようにしたいなら、特定のアプリしか利用できないアカウントを別途作成し、そのアカウントを利用させればよい。「設定」画面から「アカウント」を開き、「家族とその他のユーザー」で「その他のユーザーをこのPCに追加」をクリックする(図1、図2)。ローカルアカウントを作成し、アプリを指定すれば、それ以外のアプリが使用できなくなる(図3～図7)。

第6章

高速化・最適化 の裏ワザ

「パソコンの起動が遅い」「動作が重い」といったイライラは、誰もが感じたことがあるはず。この悩みを解消するための設定ワザを紹介しよう。やや上級者向きのワザなので、慎重に操作して試してほしい。

「GUIブートなし」で ウィンドウズを軽快起動

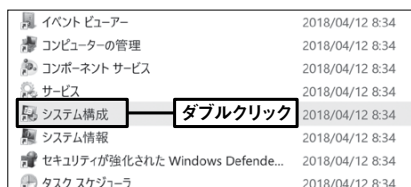
簡単な設定でウィンドウズを高速起動



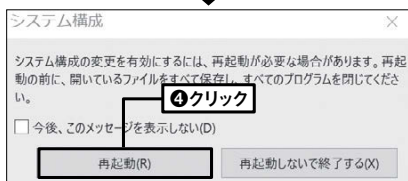
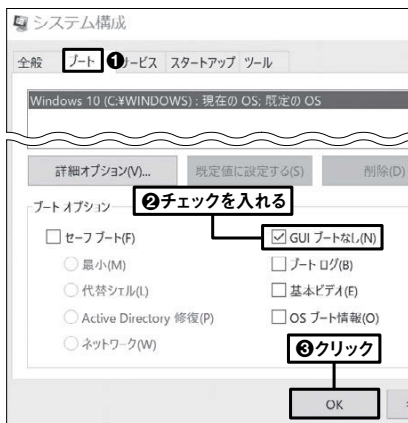
① 図1 タスクバーの検索欄に「コントロールパネル」と入力(①)。検索結果に「コントロールパネル」が表示されたら選択する(②)



① 図2 コントロールパネルが開いたら「システムとセキュリティ」をクリックし(①)、次の画面で「管理ツール」をクリックする(②)



① 図3 「管理ツール」画面から「システム構成」をダブルクリックする



① 図4 「システム構成」画面では「ブート」タブを選択(①)。「ブートオプション」の項目から「GUIブートなし」のチェックボックスをオンにして「OK」を押す(②③)。続いて表示されるダイアログボックスで「再起動」をクリックすれば設定は完了となる(④)

ウィンドウズ10の初期設定では、起動時にロゴマークなどが表示される「GUIブート」方式になっている。ロゴなどの表示中は待ち時間が発生し、システム起動を遅らせる要因のひとつとなっている。

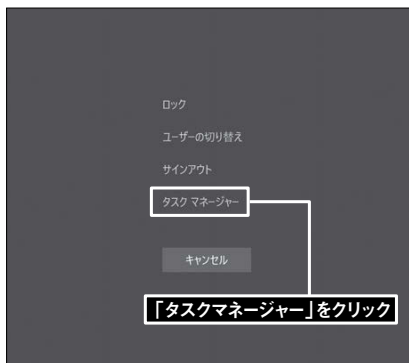
ロゴを表示させずに起動する「GUIブートなし」に切り替え、高速起動を実現しよう(図1～図4)。

使用頻度の高いアプリの優先度を上げて動作を高速化

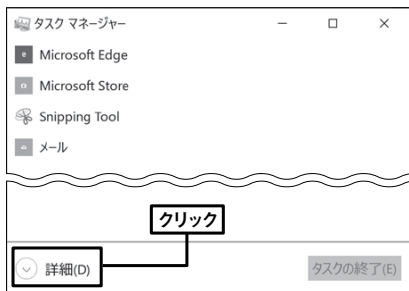
処理の優先度を手動で再設定する裏ワザ



④ 図1 キーボードの「Ctrl」+「Alt」+「Delete」キーを同時に押す



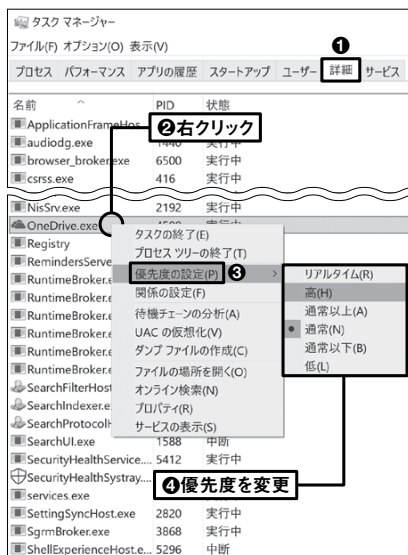
④ 図2 壁紙が単色に切り替わり、上図のようなメニューが表示される。「タスクマネージャー」をクリックする



④ 図3 タスクマネージャーが開く。上部に現在起動中のアプリが表示される。下部の「詳細」をクリックする

ウィンドウズでは常時さまざまなプログラムが動いており、主にシステム面の重要度によって処理の優先度が振り分けられている。この優先度は変更することが可能だ。

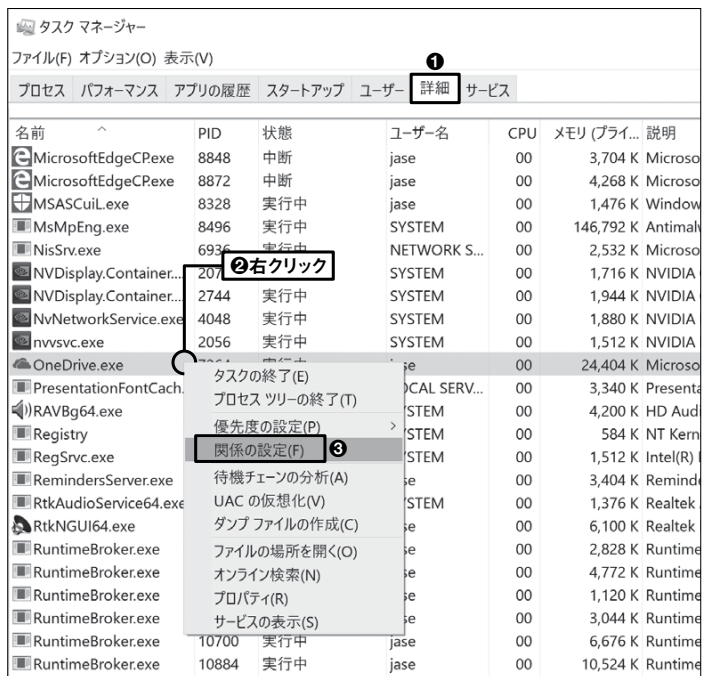
仕事でよく使うツールなど、とにかくサクサク動いてほしいアプリの優先度を上げて動作を高速化できる(図1～図4)。ただし、むやみに優先度を変更するとシステムプログラムに影響してウィンドウズが不安定になるリスクがある。あくまで一時的な処方にとどめよう。



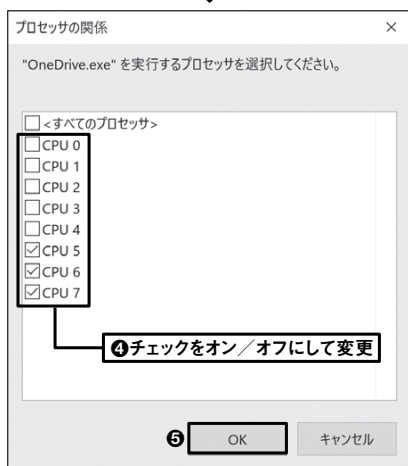
④ 図4「詳細」タブを開く(①)。高速に処理したいアプリを右クリックし(②)、「優先度の設定」で優先度を変更する(③④)

CPUコアの割り当てを変更して パソコンの処理能力を最適化

優先しないアプリのCPUコア数を制限



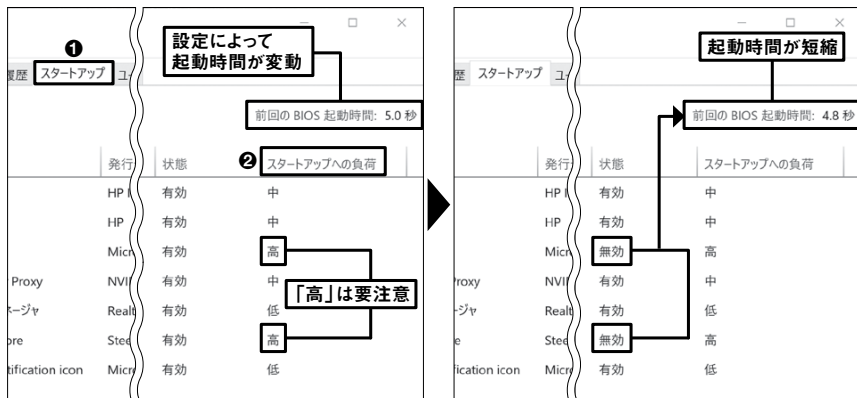
① タスクマネージャーを起動し、「詳細」タブを開く(①)。CPUコアの割り当てを変更したいアプリを右クリックし(②)、「関係の設定」をクリックすると(③)、「プロセスとの関係」ウィンドウでCPUコアを個別にオン／オフにできる(④⑤)。基本的にどのアプリもフルで割り当てられているので、コア数を増やすというよりは、優先度の低いプログラムのコア数を減らしてCPUに余裕を持たせる、といった使い方だ。



最近マルチコアのCPUが当たり前となり、多くのアプリが複数のCPUコアを利用して並列に処理する。一方で、特定のアプリがすべてのコアを占有してしまうと、OSやほかのアプリの動作が重くなるケースがある。そんなとき、優先度の低いアプリが使用するコアを制限すると、OSやほかのアプリの処理に余裕が生まれる可能性がある。タスクマネージャーを開いてアプリ名を右クリックし、「関係の設定」から使用コアを限定する上級テクだ(図1)。

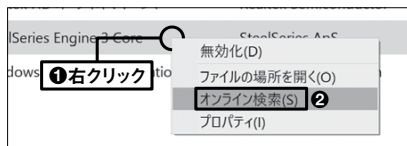
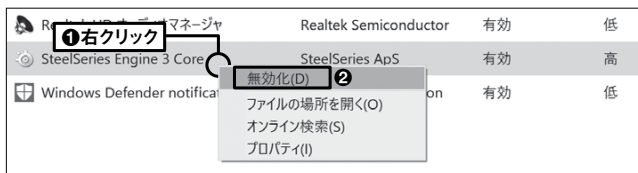
パソコンの起動を遅くする 一番の原因はスタートアップアプリ

タスクマネージャーで負荷の高さを確認



④ 図1 「Ctrl」+「Alt」+「Del」キーを押してタスクマネージャーを起動し(141ページ参照)、「スタートアップ」タブを開く(①)。「スタートアップへの負荷」に「高」と表示されたアプリはパソコンの起動時間を遅くしている可能性がある(②)。試しに「高」と表示されたアプリを「無効」にして再起動を行ったら、起動時間が短くなった

⑤ 図2 アプリを無効にするには、対象のアプリを右クリックして「無効化」を選択する(①②)



⑥ 図3 無効にしても問題ないかを確認するには、事前にインターネットで調べてみるとよい。右クリックメニューを開き(①)、「オンライン検索」を選ぶと(②)、検索結果が表示される

スタートアップアプリとは、パソコンの起動に合わせて自動で立ち上がるアプリのことで、パソコンの起動を遅くする原因になる。スタートアップアプリはタスクマネージャーの「スタートアップ」タブで確認でき、負荷度が高いものを無効化すれば起動時間を短縮できる(図1)。無効化はアプリの右クリックから行えるが、それがどのようなものか不明な場合は検索して確認しよう(図2、図3)。

ワンドライブの設定を 少し変えるとネットが速くなる

見えない所でネットワークを圧迫している

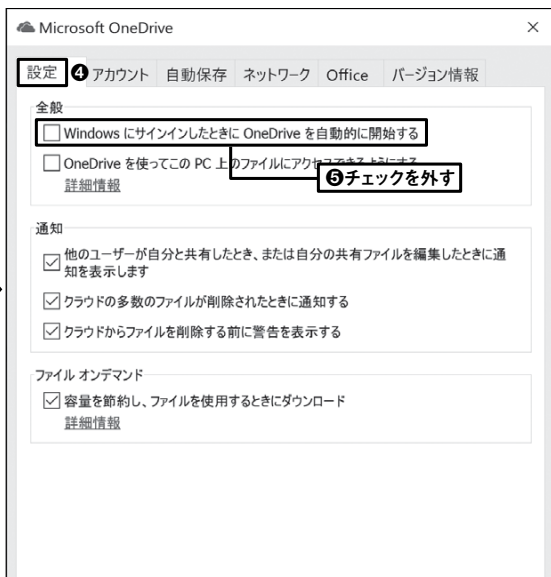


図1 通知領域でワンドライブのアイコンをクリックし、「その他」→「設定」を選ぶ(①～③)。「設定」タブの「Windows にサインインしたときに…」のチェックを外す(④⑤)[注]

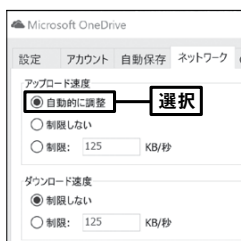


図2 初期設定では「ネットワーク」タブの「アップロード速度」が「制限しない」になっている。「自動的に調整」に変更することでネットワークが安定する

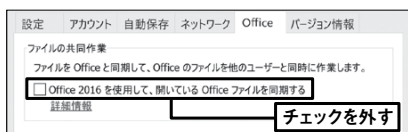


図3 「Office」タブの「ファイルの共同作業」にチェックが入っている場合はチェックを外す。ネットワークのトラフィックが軽減される

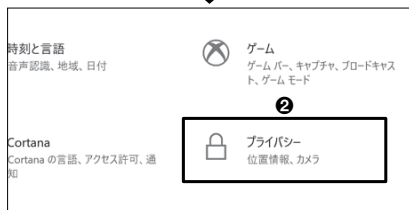
ファイルの同期を自動かつリアルタイムで行ってくれるワンドライブは非常に便利だが、これは常にネットワークを使用しているからであり、環境によってはネット回線を圧迫している可能性がある。もしワンドライブの同期機能を使っていないのなら、ここで紹介するワンドライブの設定を見直してみよう。バックグラウンドで行われていた通信を制限することで、ネットが速くなる場合がある(図1～図3)。

[注] このように設定した場合、ファイルを同期するためにはスタートメニューからワンドライブを手動で起動する必要がある

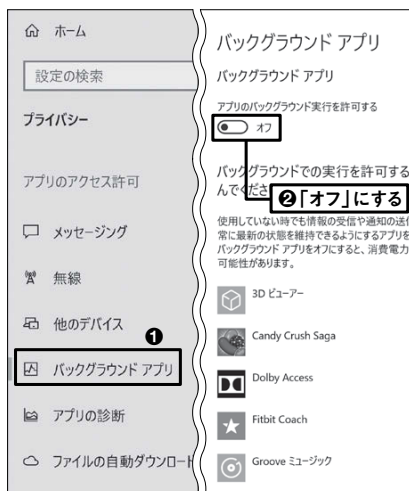
知らぬ間に動作する バックグラウンドアプリを制御

すべてオフにしても問題ないが取捨選択もあり

バックグラウンドアプリを全停止

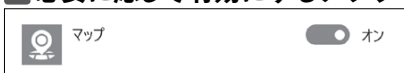


① 図1 スタートメニューを開き、歯車アイコンをクリックして「設定」画面を表示(①)。「プライバシー」を選択する(②)



② 図2 左側で「バックグラウンドアプリ」を選択(①)。右のスイッチをクリックして、全アプリのバックグラウンド動作を無効にする(②)

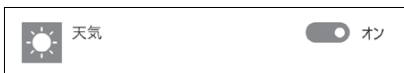
必要に応じて有効にするアプリ



③ 図3 ナビ機能を利用する際にバックグラウンドで位置情報の収集を行う可能性がある



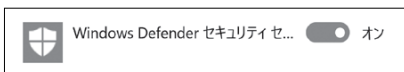
④ 図4 メールを受信をチェックするためにバックグラウンドでウェブ接続を行う可能性がある



⑤ 図5 最新の気象情報を収集するためにバックグラウンドでウェブ接続の可能性がある



⑥ 図6 複数のパソコンで付箋を共有している場合はバックグラウンドで同期する場合がある



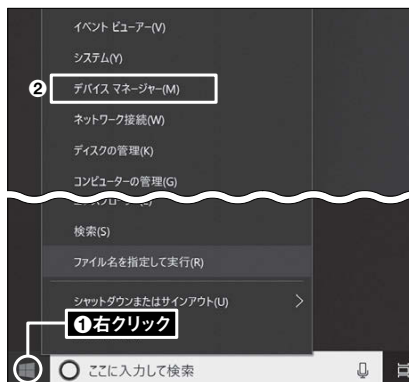
⑦ 図7 最新の定義ファイルへのアクセスをバックグラウンドで行う可能性がある

バックグラウンドでアプリが動作すると、インターネットの速度に影響するだけでなく、ノートパソコンの場合バッテリーの消費が早くなるので注意が必要だ。すべてのバックグラウンド実行を「オフ」にしてもいいが(図1、図2)、ユーザーのライフスタイルに合わせて必要なアプリは有効にしてもよいだろう(図3～図7)。

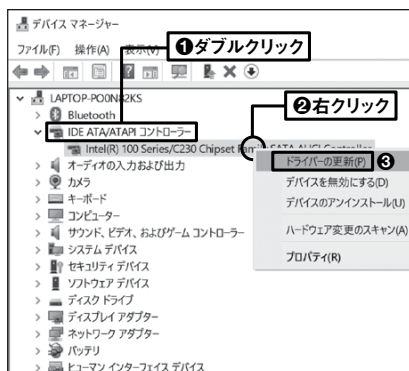
複数のハードディスクを統合して 1つの大容量ハードディスク化する

外付けも内蔵も1つのハードディスクとして使う

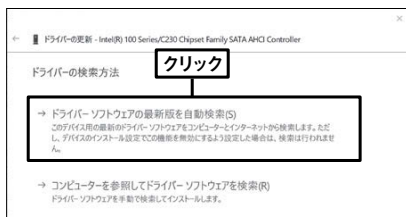
IDEコントローラの更新を行う



① 図1 複数のハードディスクを統合する機能、「記憶域プール」の実行する前に必ずチェックしなければならないのが、ハードディスクの接続を管理する「IDEコントローラー」のドライバーだ。これを最新の状態にしておかないと「記憶域プール」は動作しない。IDEコントローラーの状態を確認するには、スタートボタンの右クリックメニューを開き(①)、「デバイスマネージャー」をクリックする(②)



② 図2 「IDE ATA/ATAPIコントローラー」をクリックすると、パソコンに搭載されたIDEコントローラーのモデル名が表示される(①)。右クリックして「ドライバーの更新」を選ぶ(②③)



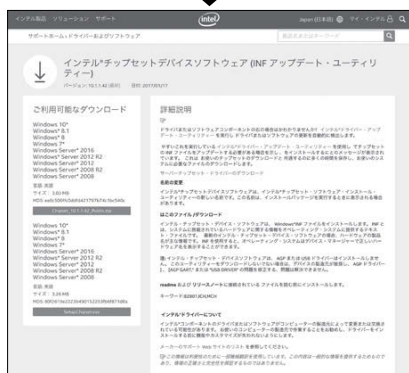
③ 図3 「ドライバーソフトウェアの最新版を自動検索」をクリックする



④ 図4 ドライバーの検索が完了するまでしばらく待つ。更新ファイルが見つかった場合は自動でインストールされる。問題は「このデバイスに最適なドライバーが既にインストールされています」と表示されるときだ。この表示は、最新かどうかではなく「最適」という意味で、バージョン自体は古いままのことも多い。後述の図8で「記憶域プール」を試してみて、うまくいかなかったら自分でドライバーを探し、インストールしよう

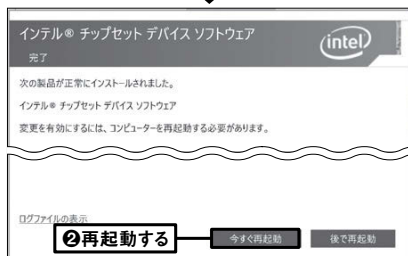
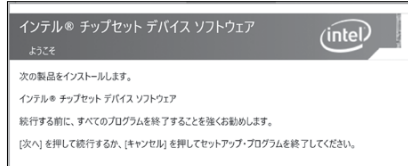
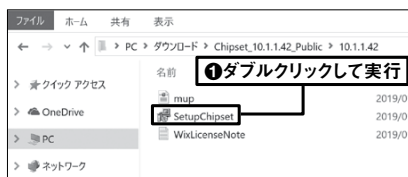


⑤ 図5 手でドライバーをインストールするには、図2で確認したIDEコントローラーのモデル名をインターネットで検索するのが手取り早い。メーカーの公式サイトにアクセスしよう



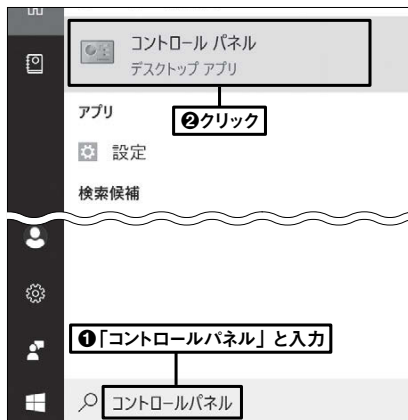
④ 図6 ウィンドウズのバージョンを確認し、最新のドライバーをダウンロードする

「記憶域プール」とは、複数のハードディスクを1つの大きなハードディスクのように仮想化する機能だ。内蔵ハードディスクや外付けハードディスクに関係なく合体できるので、物理的にハードディスクを交換することなく手軽に拡張できる。ただし、この機能は記録媒体の接続に関わるパソコンの基盤、「IDE コントローラー」と関係が深く、ドライバーのバージョンとウィンドウズのバージョンが少しでも合っていないとうまくいかない。必ずドライバーのアップデートを行おう(図1～図4)。



④ 図7 ダウンロード後、セットアップファイルを実行してインストールする(①)。完了したら必ず再起動する(②)

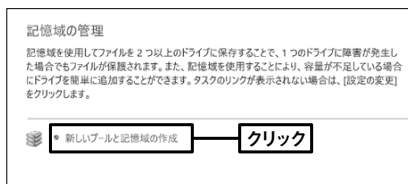
「記憶域プール」を実行する



④ 図8 タスクバーの検索欄に「コントロールパネル」と入力(①)。検索結果に「コントロールパネル」が表示されたら選択する(②)



④ 図9 コントロールパネルが開いたら「システムとセキュリティ」をクリックし①、次の画面で「記憶域」をクリックする②



④ 図10 「記憶域の管理」にある「新しいプールと記憶域の作成」をクリックする



④ 図11 統合したいハードディスクをパソコンに接続する。HDDやSSDが混在する場合でも問題なく統合される。ただし、USBメモリーは認識されないので注意しよう

手でインストールするのが最も確実だ(図5～図7)。ドライバーの更新が終わればあとは簡単。コントロールパネルで「記憶域」を開き、「新しいプールと記憶域の作成」を実行しよう(図8～図10)。統合に使うハードディスクをパソコンに接続し、チェックを入れる(図11、図12)。ファイルシステムや容量を設定し、「記憶域の作成」をクリックすれば仮想ディスクが作成される(図13)

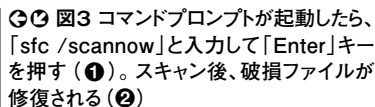
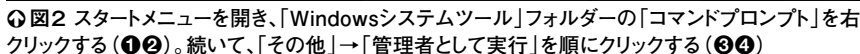


④ 図12 認識されたハードディスクが表示される。統合したいハードディスクにチェックを入れ①、「プールの作成」をクリックする②



④ 図13 ドライブ文字やファイルシステムなどを設定し、「記憶域の作成」をクリック。1つの大きなハードディスクとして認識されるようになる

高速化・最適化の裏ワザ

[illegible]

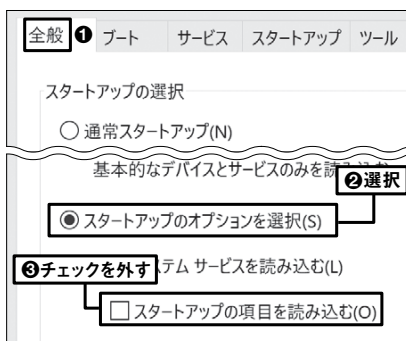
ウィンドウズの動作が不安定になったときにまず試したいのが「システムファイルチェッカー」。Cドライブのファイルをスキャンして破損ファイルを自動で修復する。コマンドプロンプトを管理者として実行し、コマンドを入力しよう(図1～図3)。

不調の原因を正確に突き止めて ピンポイントで問題解決

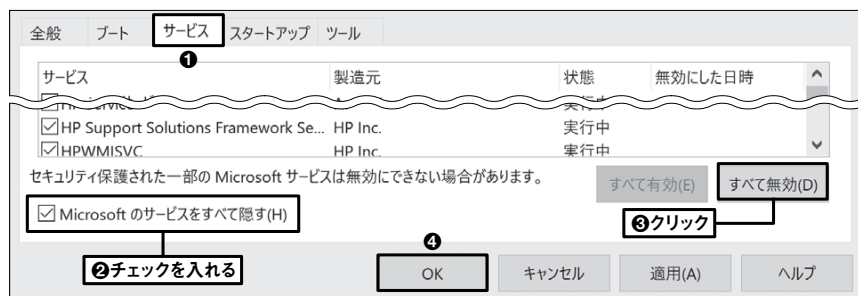
「システム構成」からクリーンブートして検証



① 図1 タスクバーの検索欄に「msconfig」と入力①。検索結果に「システム構成」が表示されたらクリックする②



② 図2 「全般」タブを開く①。「スタートアップのオプションを選択」を選び、「スタートアップの項目を読み込む」のチェックを外す②③④



「クリーンブート」とは、ウィンドウズを最小限のプログラムだけで起動すること。パソコンの調子が悪いときに、どのプログラムが影響しているのかを絞り込みやすくなる。「システム構成」を開き、スタートアップ項目とマイクロソフト提供のサービス以外をすべて無効にして再起動すればよい(図1～図3)。これで問題が起きない場合、図3で一部のサービスだけ無効化して同様にテストし、問題のあるプログラムを絞り込んでいく。



⑤ 図3 続けて「サービス」タブを開く①。「Microsoftのサービスをすべて隠す」にチェックを入れた後②、ウィンドウ右の「すべて無効」ボタンをクリック③。「OK」を押して設定を保存する④。この状態で再起動すれば、クリーンブートになる⑤

第7章

スマホ連携 の裏ワザ

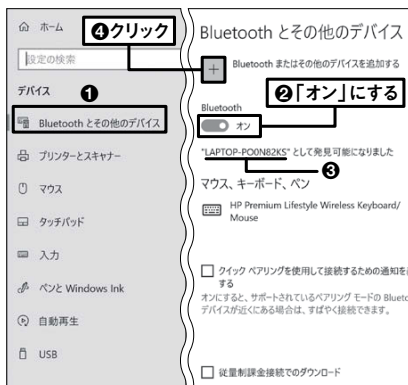
ウィンドウズ10は、スマートフォンとの連携機能が強化されている。スマホで見たウェブページの続きをパソコンで見たり、パソコンの認証にスマホを利用したりと、役立つ機能が目白押しだ。

スマホとパソコンをペアリングして 離席時にウィンドウズを自動ロック

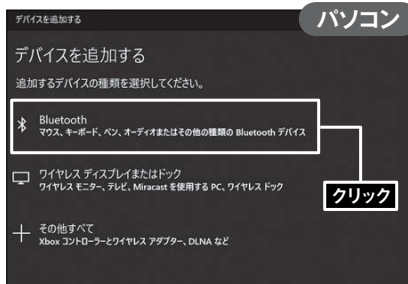
うっかりロックするのを忘れて出かけても大丈夫



① 図1 スタートメニューを開き、歯車アイコンをクリックして「設定」画面を表示(1)。「デバイス」を選択する(2)



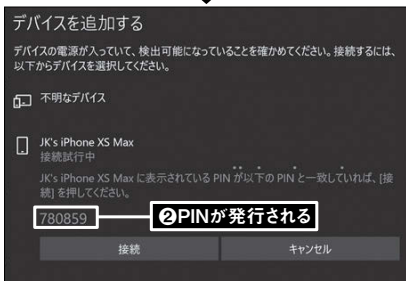
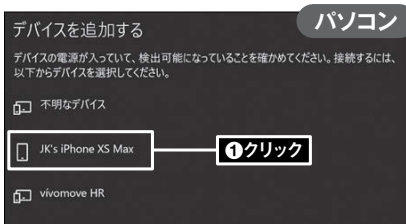
② 図2 左側で「Bluetooth とその他のデバイス」を選択(1)。右側で「Bluetooth」のスイッチを「オン」にすると(2)、パソコンの名前が表示される(3)。「+」ボタンを押してスマホとのペアリング設定を開始する



③ 図3 デバイスの種類を選択する。スマホは、一番上の「Bluetooth」からペアリングできる



④ 図4 スマホ側の「Bluetooth」が有効になっていることを確認する



⑤ 図5 スマホの名前が表示されたらクリックする(1)。「接続試行中」と表示され、6桁のPINが表示される(2)。この数字はスマホにも表示される。このまましばらく待機する



⑥ 図6 スマホ側で図5と同じPINが表示されていることを確認し、「ペアリング」をタップする



図7 ペアリングが完了すると「デバイスの準備が整いました!」と表示される。「完了」をクリックしてウィンドウを閉じる

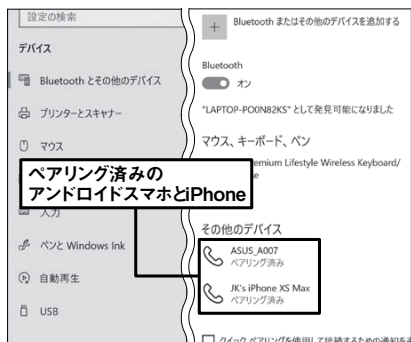


図8 図2の画面に戻ると、「その他のデバイス」に追加されたスマホが確認できる。ここでは例としてiPhoneでペアリングを行ったが、Androidスマホも、同じ要領で追加できた

「動的ロック」とは、ブルートゥースでペアリングしたスマホをパソコンの鍵のように使う機能。スマホを持ってパソコンから離れると、自動でウィンドウズがロックされる。

スマホのペアリングは、「設定」画面の「デバイス」から行う。パソコンとスマホの両方のブルートゥースを「オン」にし、PINを確認してデバイスを追加しよう(図1～図7)。ペアリング済みのスマホは「その他のデバイス」項目で確認できる。Androidスマホ

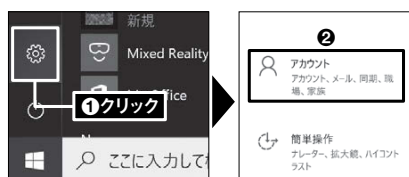


図9 ペアリング済みのスマホを持ってパソコンから離れると、ウィンドウズが自動でロックされる機能を有効化する。スタートメニューを開き、歯車アイコンをクリックして「設定」画面を表示(1)。「アカウント」を選択する(2)

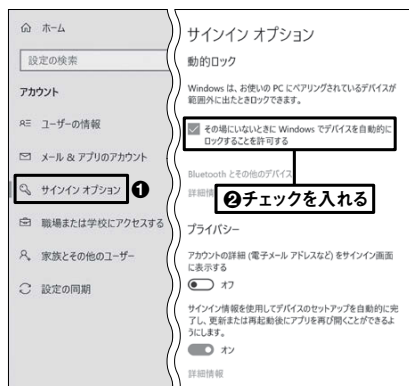


図10 左側から「サインインオプション」を選択し、右の「動的ロック」項目で「その場にいなくてもWindowsでデバイスを自動的にロックすることを許可する」にチェックを入れる

ホ、iPhoneのどちらも同じ手順ですぐにペアリング可能だ(図8)。

ペアリングが完了したら動的ロックを有効にする。「設定」画面の「アカウント」を開き、「サインインオプション」で「その場にいなくても…」にチェックを入れれば動的ロックが使えるようになる(図9、図10)。スマホを持ってブルートゥースが届かなくなる距離(約10メートル以上)まで離れると、1～2分後にパソコンがロックされる。

スマホで開いたウェブページをパソコンに飛ばして閲覧する

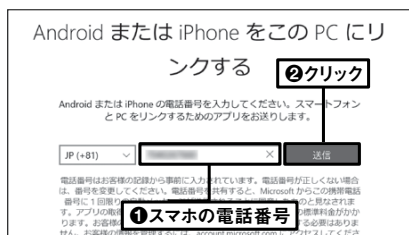
URLをコピーして共有する必要がある



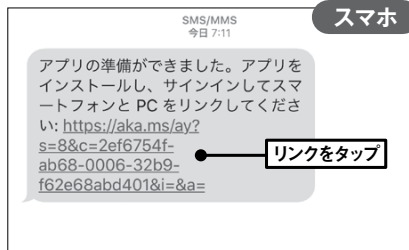
① 図1 「設定」画面を開き、「電話」を選択する



② 図2 「スマートフォンの追加」で「+」ボタンをクリックする



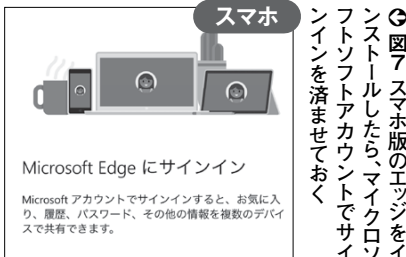
③ 図3 自分宛てにSMSを送信する。電話番号を入力して「送信」をクリックする(①②)



④ 図4 スマホに届いたSMSのリンクをタップ



⑤ 図6 マイクロソフトランチャーは、スマホ全体をマイクロソフトアカウントとリンクするアプリで、メディアデータや連絡先までできると管理する。高性能ではあるが、かなり大掛かりなアプリという印象。シンプルにウェブサイト共有するならエッジで十分だ。アンドロイド版もあるので、エッジをお薦めしたい



⑥ 図5 iPhoneの場合は、エッジ(スマホ版)のリンクになっているが、アンドロイドの場合はマイクロソフトランチャーのリンクとなっている

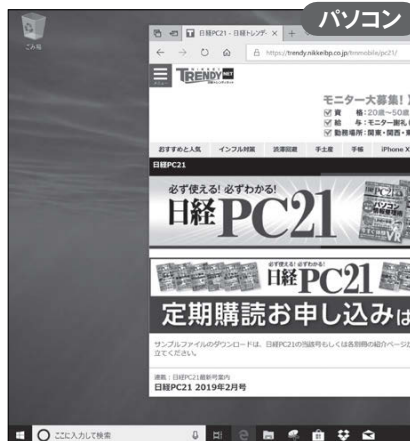
⑦ 図7 スマホ版のエッジをインストールしたら、マイクロソフトアカウントでサインインを済ませておく



④ 図8 スマホ版のエッジでウェブページにアクセスする。画面下の中央にあるアイコンが共有機能となっている。タップしてみよう



④ 図9 同じマイクロソフトアカウントでひも付いているパソコンの名前が表示される。タップして選択すると現在開いているサイトの情報がパソコンに送信される



④ 図10 スマホで閲覧中のウェブページがパソコン側のエッジで開く。サイトによってはスマホ版のページがそのまま再現されることがある

スマホでチェックしていたウェブページを、会社や自宅のパソコンで読みたいとき、そのページのURLをテキストデータで共有するのが一般的だ。しかし、マイクロソフトアカウントを持っているユーザーなら、スマホからパソコンに飛ばすようにウェブページを開くことができる。

方法はいろいろあるが、最も簡単なのは「エッジ」を使う方法だ。ウィンドウズ版、iOS版、アンドロイド版すべて入手可能で、マイクロソフトアカウントさえあれば簡単にひも付けられる(図1～図7)。

エッジにはウェブページの共有機能が画面下に用意されていて、これをタップすることで、スマホで開いているウェブページをすぐさまパソコンのウェブブラウザに表示させられる(図8～図10)。

パスワードよりも強固なセキュリティ スマホ連動の新しい認証システム

パスワードの入力が不要なオーセンティケーター

アカウントとパスワードの入力認証



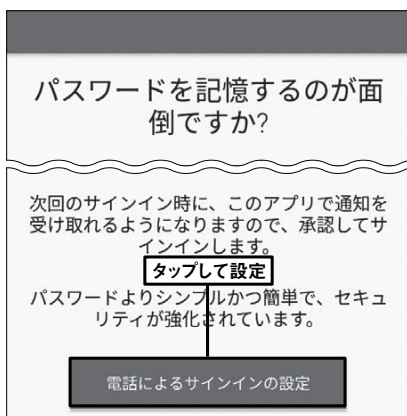
パスワード入力不要のスマホ認証



④ 図1 これまでのIDとパスワード入力による認証方式は、入力者の特定が困難であるため、セキュリティ面に大きな問題があった。一方、スマホなどを併用するオーセンティケーター方式は、そのスマホを持っている本人しかサインインできず、かつ方法もシンプルで簡単になる



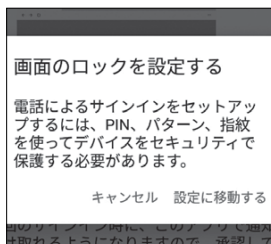
④ 図2 アンドロイドなら「Google Playストア」を、iPhoneなら「App Store」を開き、検索欄に「Microsoft Authenticator」と入力(1)。アプリが表示されたら端末にインストールする(2)



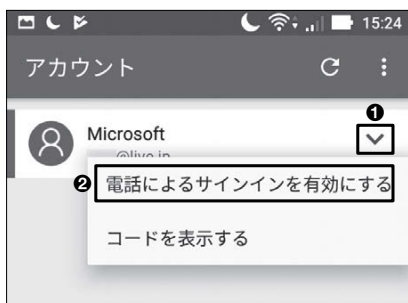
④ 図4 サインイン後、「電話によるサインイン設定」を行う。タップして有効化しよう。これにより、スマホから承認するだけでパスワードを入力することなくサインインできるようになる



④ 図3 追加するアカウントの種類を選択する。ここでは例として、「個人用アカウント」を選択



④ 図5 ロックの設定がされていないと、スマホによるサインインを設定できない。PINや指紋を登録して端末を保護しよう



④ 図6 スマホによるサインイン設定を行わず、2段階認証設定のみ行った場合でもアカウントは登録される。スマホによるサインインは、「V」を押して後から設定することが可能だ(①②)



④ 図7 サインインの手順がどのように変わったかを確認してみよう。パソコンのウェブブラウザからマイクロソフトのホームページ(https://www.microsoft.com/ja-jp/)を開き、サインインアイコンをクリックする(①②)



④ 図8 パスワードの入力画面で、「代わりに Microsoft Authenticator アプリを使用する」が選択可能になっている。クリックしよう

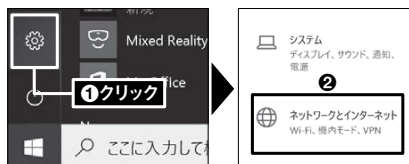


④ 図9 スマホのマイクロソフトオーセンティケーターに通知が届く。「承認」をタップすると、パスワードの入力なしでサインインできる

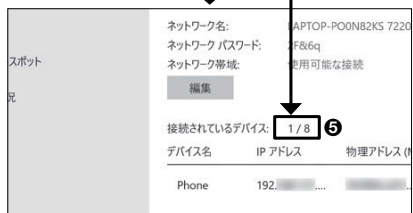
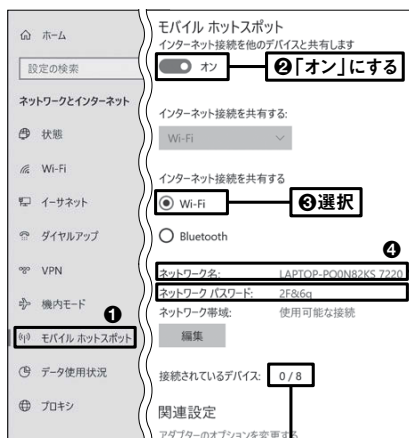
マイクロソフトアカウントのサインインは、IDとパスワードを入力するだけでも行えるが、IDとパスワードを知られてしまうと誰でもサインインできてしまうため、セキュリティに問題がある(図1)。そこで「マイクロソフトオーセンティケーター」をスマホにインストールして利用するとよい(図2～図3)。「電話によるサインインの設定」を有効化すれば、スマホが鍵代わりになり、サインイン時のパスワード入力作業が省けるので便利だ(図4～図6)。また、マイクロソフトアカウントでサインインする際にスマホが必要になるので、本人以外がなりすましてサインインするのを防ぐ効果がある(図7～図9)。

有線LANしかない場所で スマホやタブレットをWi-Fiに接続

ウィンドウズの設定でパソコンをWi-Fiルーター化



① 図1 スタートメニューから「設定」画面を表示し(①)、「ネットワーク」をクリックする(②)



② 図2 左側で「モバイルホットスポット」を選択(①)。「モバイルホットスポット」を「オン」にし(②)、「インターネット接続を共有する」で「Wi-Fi」を選択する(③)。Wi-Fi接続がうまくいかない場合は「Bluetooth」を選んでもいいが、Wi-Fiより低速なのでお薦めしない。最後に、ネットワーク名とパスワードを確認し、必要に応じて控えておく(④)。最大接続可能台数や接続中のデバイス数も確認可能だ(⑤)



有線LANしかないホテルでパソコンはネットに接続できたが、スマホ用のWi-Fiがない……。そんなときはウィンドウズの設定で、有線LANに接続したパソコンをWi-Fiルーター化するワザを使おう。パソコン側で、「設定」画面の「ネットワークとインターネット」を開き、「モバイルホットスポット」を有効にすれば準備完了だ。あとは発行されたネットワーク名とパスワードをスマホやタブレットで入力し接続すればよい(図1、図2)。

アンドロイドスマホのアプリは パソコンから遠隔でインストール

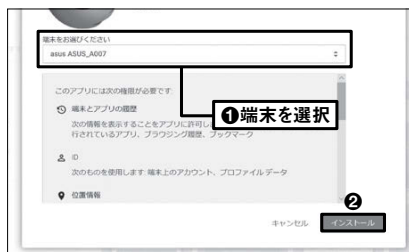
スマホで操作するより効率的



④ 図1 パソコンのウェブブラウザからグーグルプレイストア (<https://play.google.com/store>)を開き(①)、「ログイン」をクリックしてスマホと同じアカウントでログインする(②)



④ 図2 スマホにインストールしたいアプリを選び、「インストール」をクリックする



④ 図3 「端末をお選びください」欄からインストールするスマホを選び(①)、「インストール」をクリックする(②)



④ 図4 「インストール」ボタンが「インストール済み」に変わったら、スマホへのインストールが完了している。スマホを確認しよう

アンドロイドスマホにアプリを導入する際、スマホ上でストアアプリを起動してインストールするのは意外と面倒だろう。動作が軽く画面も大きいパソコンから遠隔でインストールしたほうが何倍も効率的だ。パソコンのウェブブラウザでグーグルプレイストアを開き、スマホと同じアカウントでログインすれば準備は完了(図1)。インストールしたいスマホを選択して「インストール」ボタンをクリックするだけだ(図2～図4)。

本PDFは、日経PC21が2019年1月24日に発行した雑誌「日経PC21 2019年3月号」の特別付録「Windows 10裏ワザ事典」を基に作成しました。掲載内容は当時のものであり、最新の状況と異なる場合があります。ご了承ください。

(c)日経BP社 2019

●ご注意 収録されているデータの一部または全部を、日経BP社の書面による許諾を得ずに複製、複写、転載、翻訳、改変、転用すること、および、放送や通信ネットワークで送信、配布すること、2力所以上からアクセス可能な環境で使用することは著作権法で許された範囲内を除き、一切認められておりません。